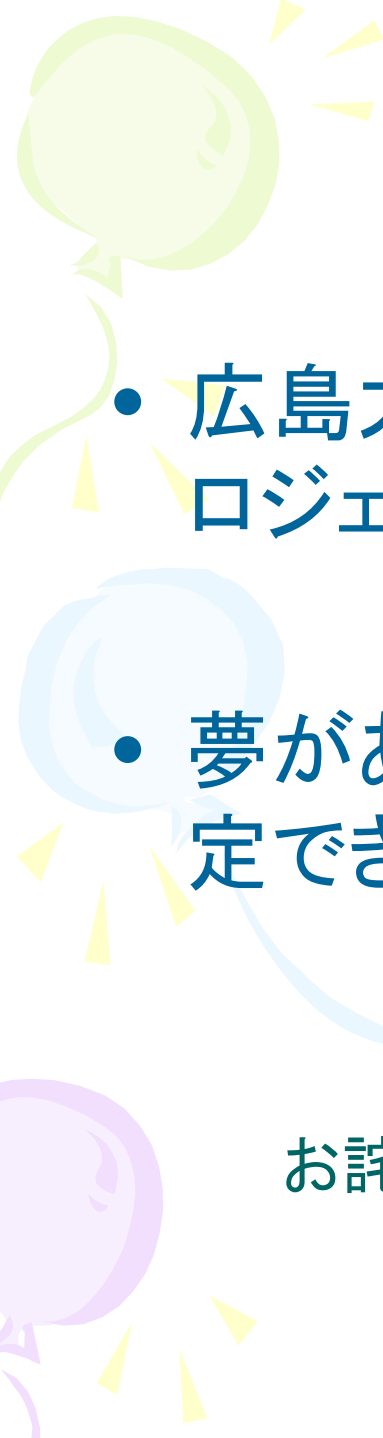


大学から見た次の一歩

2007-2-1 光赤天連シンポジウム
ショートコメント

広島大学 川端 弘治

- 
- 広島大学宇宙科学センターの現状と、学外プロジェクトへの参画の可能性
 - 夢があり、且つ実効性のある長期計画を策定できないものか

お詫び： 数字を伴わない、思いつきのコメントです

広島大学宇宙科学センター

2004年度 併任教授1、助手1、院生～1

望遠鏡移設場所調査、選定。移設費・開発費概算要求。

2005年度 併任教授1、(客員教授1)、助手2、院生～2

天文台建設。望遠鏡移設・改造。

2006年度 併任教授1、教授1、助手2、院生～2

望遠鏡移設立ち上げ。観測装置開発。持ち込み装置受け入れ。観測。

2007年度 併任教授1、教授1、助手2、院生～5?

外部プロジェクト観測の開始予定。観測装置開発。

2008年度 教授1、助手2、院生～8?

ようやく、腰が落ち着く頃か。。。。

～2012年 GLAST phase 1 終了

望遠鏡移設・装置開発のお金が付いてから2年、天文台が建ち、望遠鏡が動き出し、装置開発も進みつつあるが、まだインフラ・体制整備の課題が山積しており、もうしばらくは施設・研究グループ立ち上げに伴う地味な作業に忙殺されそう。

2008—2009年には観測・運用体制が確立し、チームとしての開発力も多少ついてきているであろう。自身の観測研究・保守を続けつつ、

- 手っ取り早く使える望遠鏡を利用した萌芽的実験・開発
- 外部プロジェクトへの積極的協力・参加



次の一步を考える前提として

- 大学の役割
 - 高等教育、研究
 - 優れた知識・技能etcを持つ人材の育成
 - (地域市民の)学術リテラシーの高揚
- 共同利用研の役割
 - 学術施設・設備の提供
 - COE(優れた研究者集団)
 - 研究者コミュニティの拠点、中心的役割

光赤外ロードマップ策定に関して

- プロジェクトの大型化
- プロジェクト乱立ぎみ
- 研究テーマの細分化
- マンパワーは増えず
- 予算も停滞(人口減少、少子化、定員削減)
- リソースは有限

プロジェクト(の中身)の整理／チームの再編は避けられない

(地方)大学の悩み

- 志望倍率の低下、学力の低下
- (研究実績に比べての)志望人気の低下

→ 中高生の人気回復を模索
中高生向けイベント
地域市民との連携

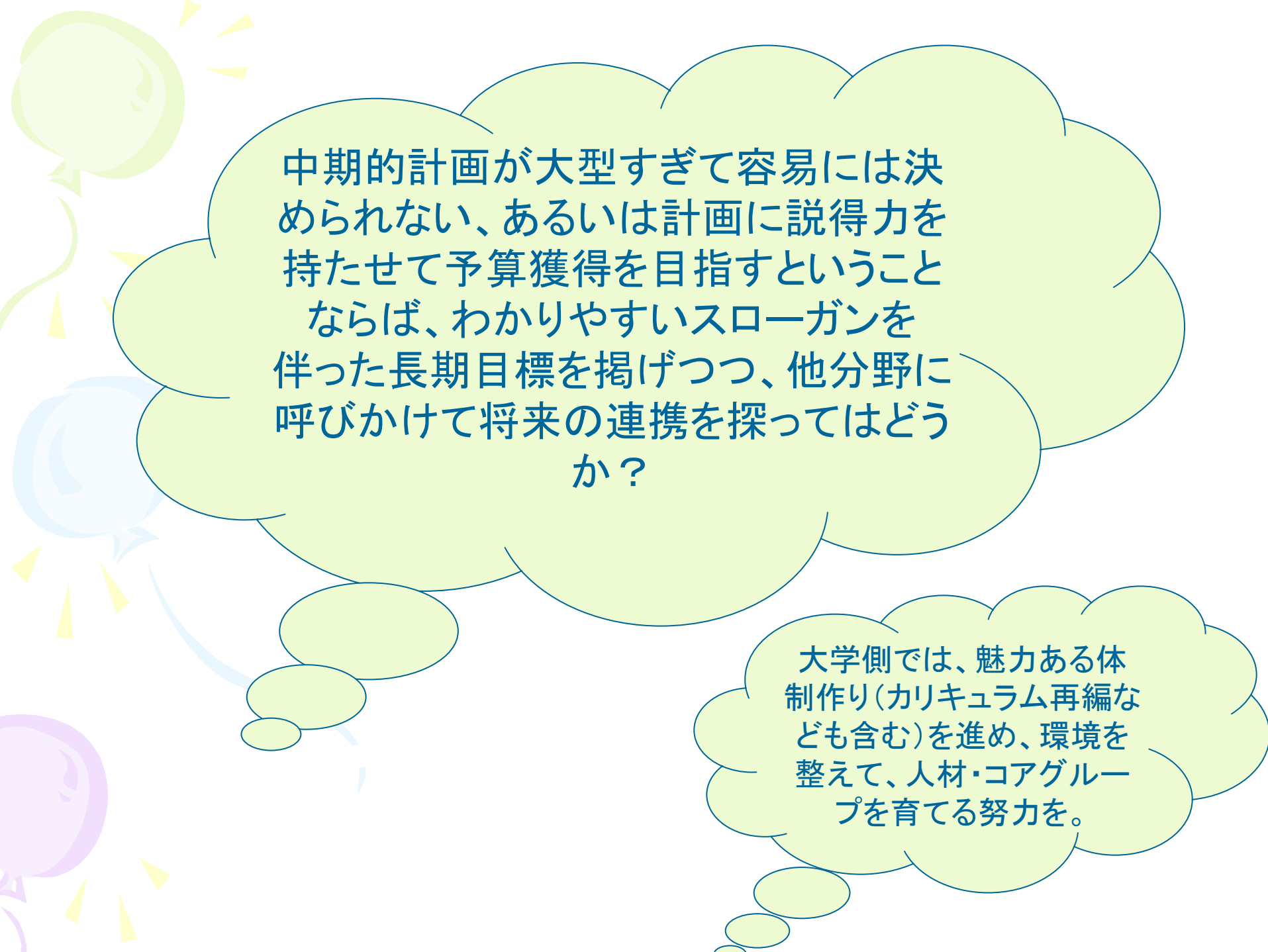
研究科、学科、研究所、センター等の再編模索
(人気あるキーワードを前面に出して高校生へ
アピール; 大学ごとのアイデンティティ)

- 中期的計画(5-8年)を議論する根拠となる「長期目標」を、他の研究分野と融合ないしは協力を得て、一般市民にもわかりやすい言葉で、策定できないか？

- 例えば「50年後に月面〇〇m望遠鏡と火星研究所を作って、宇宙生命の証拠を見つけよう。」

今後10年は海外に半歩遅れてもOK。基礎力アップに専念。

- 人類唯一の事業 — 国際協力
- 地上望遠鏡と人工衛星、両方の経験が生きる
- 機関再編(NAOJ, JAXA, KEK, 極地研, etc.)
- 分野間協力(天文、物理、生物、地学、化学)
- 中・小規模な開発研究や萌芽的研究も継続
(いくつかのコアグループによる先端技術開発)



中期的計画が大型すぎて容易には決められない、あるいは計画に説得力を持たせて予算獲得を目指すということならば、わかりやすいスローガンを伴った長期目標を掲げつつ、他分野に呼びかけて将来の連携を探ってはどうか？

大学側では、魅力ある体制作り(カリキュラム再編なども含む)を進め、環境を整えて、人材・コアグループを育てる努力を。